

会誌編集というお仕事

会員 服部 博信



1. 会誌編集部に入ったきっかけ

私が会誌編集部に入ったきっかけは、前任者からの引き継ぎです。事務所内の先輩弁理士から、会誌編集部員を引き継いでくれないか、という依頼があり、引き受けました。それまでも日本弁理士会以外で雑誌の編集経験があったので、最初は気楽な気持ちで入れさせていただきました。しかし、会誌編集部員は誌面の編集のみならず、査読もするということが驚きました。私自身、特許や化学の知識はあっても、ほかの知的財産法は試験勉強で得た知識程度で、さらにビジネスや他の技術分野になると、素人に近い状況。そんな状況で務まるのかな、という不安がよぎったのを覚えています。ただ、実際にやってみると、各分野に明るいメンバーや、編集を長年続けているメンバーもいて、安心して編集作業、査読作業を行えました。

2. 当時の会誌編集部

私が在籍していた当時の会誌編集部は、広報センターの副センター長2名と会誌編集部の部長1名、そして6つの班という構成でした。部長は全体の運営・指揮を行い、副センター長はそのサポートをし、6つの班は、それぞれ年間2回分のパテント誌の企画・編集を任せられ、班長が指揮を執って進める、という方法でパテント誌を月1回発行していました。パテント誌の企画・編集は、基本的に各班に任されていたので、比較的自由にテーマを決めて、自由に執筆者依頼を行うことができました。特にテーマ決めは慎重かつ大胆に、最近の流行や動向を考慮しながら楽しくやらせていただいたのを覚えています。テーマが決まっても執筆者が集まらない場合もありましたが、そんな時は、部長以下、編集部のメンバーが知り合いを通じて執筆者依頼をしていただいていたので、編集部のメンバーは皆さん色々な人脈をお持ちで、いつも驚かされていました。

3. 思い出深い特集企画

印象に残っている企画は、なんといってもオリンピック企画です。オリンピック企画は何度か行わせていただきましたが、中でも室伏広治さんにインタビューを行ったのは印象的でした。当時、私は会誌編集部担当副センター長を拝命していましたので、企画していただいた班に付き添いという形でインタビューに参加させていただきました。室伏さんは非常に気さくで、記事になっていない部分でもいろいろな話をさせていただきました。特に、室伏さんは研究者としての顔もお持ちで、どのような話題でも熱心かつ緻密にお話しされるのがとても印象的でした。室伏さんのインタビュー記事を書かせていただいた2018年1月号では、表紙に室伏さんの写真を掲載することも快諾していただき、いつも地球のイラストで単調だった表紙を室伏さんの凛々しいお写真で置き換えさせていただき、読者の皆様から好評をいただいたのも印象深いです。



4. 編集に気を付けていたこと

パテント誌の編集の際は、投稿していただいた原稿をきちんとした形で掲載させていただいているかどうかを常

* 平成28年度広報センター会誌編集部部長

に考えていました。これは読者目線でも良質な記事が掲載されることはもちろん、投稿者としても意図したとおりの原稿を掲載させていただけるように注意していました。私が在籍していた当時、パテント誌は日本弁理士会実務系委員会が発表する場でもありました。しかし、このような委員会からの記事の中には、読み手の興味に寄り添っていない記事も少なからずありました。そのような記事については該当する実務系委員会に何度かお願いをし、読者に興味を持っていただける記事になんとか修正いただいていたのですが、同時に多忙な中で執筆いただいた執筆者の意図から外れないように気を付けていました。

5. 編集責任者時代の思い出

投稿者の方にも何度となく迷惑をおかけしていたことを覚えています。会誌編集部のメンバーは知的財産の専門家である弁理士ではありますが、多岐にわたる知的財産のすべてにおいて造詣が深いわけではなく、また、査読のプロというわけではありません。そのなかで行き過ぎた修正や、逆に見落としがないように、つねに気を張っていました。とはいっても問題が起こらないわけではなく、投稿者の方から指摘を受けた場合は、ご指摘のポイントをよく検討して対応するようにしていました。私が会誌編集部に入った当初は、投稿された原稿を却下することは少なかったのですが、私が部長や副センター長として会誌編集部に在籍していたころに却下率を若干上げさせていただきました。読者が興味を持っていただける質の高い記事をお届けしたいという気持ちからでしたが、逆に却下に対するクレームも増えました。ですから、私が部長や副センター長を務めていたときは、ほぼクレーム対応に追われていました。

クレームには常に丁寧に対応し、こちらの立場を理解していただくことを心がけていましたが、逆に会誌編集部側の問題に気づかされることもありました。特に、当時はホームページの改訂や投稿方法を簡略化しようとしていたこともあり、煩雑かつ不要な手続きを洗い出す作業をしていました。この作業は、投稿者の方から投稿者目線で指摘していただき、修正した点も多くありました。長い間会誌編集部をやっていると、内側の問題にはなかなか気づかず、恥ずかしい思いをしたこともありました。

6. 会誌編集部を離れて

私が会誌編集部から引退したのは2020年3月、つまり、新型コロナの問題がはじまったときでした。コロナ禍により会誌編集部が非常に難しい時期を迎えたのは想像に難くありません。同時に、私が在籍した当時からの懸念事項であった紙のパテント誌を原則廃止されたことも印象深いです。コロナ禍の副産物と言っては語弊があるかもしれませんが、新たなパテント誌の在り方を示す大きな一歩を踏み出してくれたと思っています。

7. これからのパテント誌に望むこと

パテント誌は、これからも、知的財産に関する情報を知的財産のプロである弁理士を中心として公共の場に提供する情報源であってほしいと思います。特にパテント誌は、知的財産関連の雑誌の中でも、ネット検索でヒットしやすい数少ない情報誌です。逆に言えばネットを通じて多くの方に利用されている以上、その品質・内容の正確性にはこれまで以上に気を使っていたきたいです。査読レベルの向上は、これまでも、これからも、大きな課題の一つかもしれません。私自身は会誌編集部に入った当初に査読で苦勞しましたが、今後は特別な査読チームの構成、査読レベル向上のための指針等、一層の品質向上を目指していただきたいと思っています。

また、会誌編集部の皆さんには、知的財産の情報発信という重要な役割を果たしているという誇りをもって活動していただきたいです。パテント誌は日本弁理士会が発行する機関誌であるものの、会誌の内容・編集についてはかなりの部分で独立性が担保され、一任されていると思います。このような会誌編集部の独自性を生かし、自由な発想と大胆な視点から、読者の興味を満たす唯一無二の知的財産専門雑誌を目指していただきたいです。それと同時に、読者や執筆者の方々の声を聴く謙虚さも忘れていただきたくないです。査読という立場上、どうしても上から目線と思われがちですが、常に聞く耳を持ち、皆さんからの声に気づいていただきたいと思っています。

これからも、パテント誌が知的財産系雑誌のトップランナーとして歩み続けることを期待しています。

(原稿受領 2023.1.24)